

上博楚簡『恆先』研究概況

はじめに

本稿は、『上海博物館藏戰國楚竹書（三）』（上海古籍出版社、二〇〇三年。以下『上博（三）』）に収録された『恆先』と呼ばれる竹簡資料を対象に、先行研究の現況を報告する。『恆先』の竹簡の總数は十三枚、文字の總数は計四九〇字（重文符號十二個、および第三號簡背面の「恆先」二文字を除く）。小さな文獻ではあるが、先行研究は比較的豊富で、曹峯「《恆先》已發表論著一覽（增補）」簡帛研究網 www.jianbo.org/「二〇〇八年」は、公開か

西 信 康

ら五年後の二〇〇八年の時點で、既に六十件の先行研究を収録する。その八年後の二〇一六年になると、丁四新「或……上博楚竹書《恆先》的一個疑難概念研究」（『中國哲學史』二〇一六年第二期）は、『恆先』に關する論著類は百件あまり發表されている」（二七頁）とする。一般に、出土資料は公開直後に研究の件数が激増し、年數の経過とともに減少する傾向にある。その中でも『恆先』は、期間によつて件數の増減はあるものの、今日まで比較的繼續して關心を集め續けている資料と言える。既に研究動向に關する報告もいくつか發表されているの

で、詳細はそれらにゆずり、本稿では「恆先」および「或」の語義と、「思想的問題意識」とに論点を限定し報告する。

一、「恆先」の語義

(一)「恆先」か「恆」「先」

公開當初より注目されたのは、第一號簡冒頭から、第三號簡にかけての記載であつた。そこには次のようにある。

恆先無有、樸、靜、虛。樸大樸。靜大靜。虛大虛。自壓不自忍、或作。有或焉氣、有氣焉有有、有有焉有始、有始焉有往者。未有天地、未「以上第一號簡」有作行出生、虛靜爲一、若寂夢夢靜同、而未或明、未或滋生。恆氣是自生、恆莫生氣。氣是自生自復作。恆氣之「以上第二號簡」生、不獨有與也。或恆焉、生或者同焉。昏昏不寧、求其所生。異生異：求慾自復。求慾自復。復「以上第三號簡」生之生行、獨氣生地、清氣生天。氣信神哉、云云相生。⁽³⁾

この記載は、古代中國の宇宙生成論を示す新たな資料として注目された。特に注目されたのは、「恆先」「或」「復」という用語や、「氣是自生」といった表現、および「天」「地」が生成されるに至る順序などであつた。とりわけ、冒頭の「恆先」という用語については、多様な解釋が提示されている。⁽⁵⁾今、諸研究を通覽すると、『恆先』全體の思想や、局所的な文意に對する解釋は、總じて「恆先」の意味内容に對する理解に大きく依存するようである。つまり、「恆先」に對する理解を中心とする內在的な論理の整合性が主に考慮され、本文の解釋が進められる、という傾向が認められる。本稿は、こうした分析結果にもとづき、先ず「恆先」の語義に關する研究動向を以下に概觀し考察する。

『恆先』は、『上博(三)』(前掲)の李零「釋文」によつて公開され、「恆先」の意味については、「道」の別名(二八七頁)であり、「終極としての「先」が「恆先」(二八八頁)との解釋が示された。この初期の説明に注目されるのは、語義解釋の實質的な内容が「道」

の別名」とする説明に依存するため、用語の構造に對する分析が不徹底に見えることである。このことは、「恆先」の語義に關する議論が今日まで絶えない原因の一つと目される⁷⁾。

『恆先』の記載を宇宙生成論と見なし、そこに想定される生成の順序について、所載の用語を矢印で結び序列化する限りであれば、「恆先」という用語の構造を嚴密に分析する必要はないかもしれない。だが、この文獻に構想される宇宙の始原の状態や生成過程について、これを文獻の記載に即して實證的かつ具體的に把握し説明するのであれば、用語の構造に對する分析が不可欠となる。そこで、「恆先」の用語としての構造を分析し、これを「恆」の「先」の意味とする解釋が研究の初期から提示された⁸⁾。その場合、「恆」は實體的な概念として、世界や領域の様相を表す名詞と解釋されているように見える。私見によれば、こうした解釋の問題は、様相を表す形容詞的な用語としてこれを捉える視點と、そうした様相にある生成過程の一段階や特異點を表す名詞的な用語とし

てこれを捉える視點とが峻別されないことにある。例えば、李旭昇主編『上海博物館藏戰國楚竹書（三）』讀本（萬卷樓圖書股份有限公司、二〇〇五年）李旭昇『恆先』譯釋は、「恆先」を「恆常未動之先」（二二〇頁）とする。この解釋によれば、「恆」は「恆常未動」の意味となろうが、この場合、「恆」の品詞はどのように捉えるべきか。「恆常未動」という状態を表す形容詞と捉える視點と、そうした状態の一段階を表す名詞と捉える視點との區別が不明確と思われる。品詞はあくまで語學上の分類に過ぎないとしても、それが意味内容の具體的な把握につながることもまた確かであろう。

一方で、用語の構造に注意し、より嚴密な説明を志向する研究もある。王中江「出土簡帛文獻與古代思想世界新視野（上）」（《學術月刊》第四十四號九月號、二〇一二年）以下「新視野」は、「恆先」を「宇宙生成のきっかけ」とした上で、「恆」と「先」とはいずれも時間概念であり、「恆先」の「先」は一般的な「先」ではなく、「久遠の先」「源先」で、宇宙のきっかけであり最初（四二頁）

とした。⁹⁾その後、この説明はより洗練され、同「終局根源概念及其譜系…上博簡《恆先》的『探微』」（『哲學研究』二〇一六年第二期、二〇一六年）には、次のようにある。

『恆先』の「恆」は早期道家の「道」「一」「太一」などと同様に、既に恆常物、恆久の實體を指し示す一つの名詞となっており、宇宙と萬物の終極的根源を指す概念と記號となっている（三五頁、「摘要」）。

ここに注目されるのは、「恆」が實體を指す名詞であり、「概念」「記號」と特定されることである。こうした品詞分類を考慮した研究も少なくはない。¹⁰⁾それら解釋の是非は改めて問題になるとしても、「恆」をある特定の狀態ないしは現象および世界を指す實體的な固有名詞と捉えるのか、あるいは、ある様相を表現する形容詞と捉えるのか。兩者を峻別することの是非もまた議論の対象になるとしても、「恆先」に對する解釋に当たっては、少なくとも兩者の區別を自覺して議論を進めることは必要と思われる。

（二）「恆」と「極」

また、楚文字の隸定についても議論が絶えない。竹簡の文字は「互」と隸定されるが、これを「亟」として、「恆先」を「極先」と讀む見解も有力である。早期に龐樸『《恆先》試讀』（www.jianbo.org/、二〇〇四年、及び中國思想史<http://zgxs.net.cn>二〇〇七年）が「極先」という解釋を示した¹¹⁾が、これをより實證的に論證したのは、裘錫圭「是『恆先』還是『極先』？」（復旦大學出土文獻學古文字研究中心<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/806>二〇〇九年）であった。出土資料に見える「互」字がそれに對應する傳世文獻で「極」に作る事例を挙げながら「互（恆）」を「亟（極）」と見なす見解を提示した。また、同「說『建之以常无有』（復旦學報（社會科學版）二〇〇九年第一期、二〇〇九年）では、『周易』繫辭上傳の「太極」が馬王堆漢墓帛書『易傳』では「大恆」に作ることを指摘する。また、「郭店楚簡『老子』では、今本第十六章「至虛極」と第五十九章「莫知則極」とに相當する字は、全て「互」に作る。∴「恆」の「互」と、

「亟」(極)を表す「互」とが混同する可能性が発生した」(二頁)として、「恆先」を「極先」と讀む見解を示した。更には、『莊子』天下篇に「建之以常無有」とある記載について考察を進め、この記載については、先ず「極」が「恆」と讀み誤られ、次いで「恆」が漢文帝の諱を避けて「常」と改められた結果の表記とした。この兩者の研究は、今日に至るまで影響力を發揮している。董珊『楚簡《恆先》初探』(同『簡帛文獻考釋論叢』上海古籍出版社、二〇一四年所收)は、龐樸說に贊同しながらも、「恆先」を「絶對の先」とし、「絶對の先」は「道」の體である：「恆先」は「道」の時間屬性についていい、「無有」は「道」が絶對的な「無」であることをいう」(三頁)とする。

なお近年、この「互」「恆」「極」を繞る問題については、丁四新「『互』與『恆先』」(鄭開主編『齊文化與稷下學論叢』齊魯書社、二〇一八年所收)は、『恆先』における計八箇所に見える「互」字について、その字體の相違に着目し、構成要素に「心」「止」字が確認される後半

の二文字については、これを「極」と隸定し、「準則の意味」(二八四頁)とする見解を提示している。だが、これについては、字義と無關係に部首が附加される現象は楚文字にも多く見られ、「心」「止」が附加される事例もその一つとして既に報告されている^②。字體の相違については、こうした事例を含めた検討が改めて必要となろう。

(三)「恆先」解釋の問題點

多くの見解が提示される中で、今日でも検討に値する問題を指摘した研究として注目したいのは、陳靜「《恆先》的本文研究與思想解釋」(『中國哲學』二〇一六年第二期、二〇一六年)である。當研究は從來の研究について、「どれも宇宙の生成に「實在の」起點があることを前提とする點では共通する」(二〇頁)と指摘する。その上で、「恆」を動詞として「追究する」と讀む解釋を提案し、「恆先无有」を「先を追究しても有が無い」の意味とする。「恆」の解釋は破格と思われるが、從來の研究に

「實在の起點」が前提されているとする洞察は貴重と思われる。⁽¹³⁾

また、早期の研究でありながら、郭靜雲「先秦自然哲學中的『天恆』觀念——由竹簡《太一》與《恆先》論及宇宙源頭」（本稿注（9））の次の指摘も重要と思われる。

「恆先」を「恆の前に在る」と解釋することは決してできない。なぜならば、「恆」は宇宙恆常の本であるから——もし「恆の前に在る」という何らかの狀態が有るならば、「恆」は恆常ではなくなり、更には宇宙の原初でもなくなるからである（三六八頁）。

多彩な解釋が提示される中で、文獻内部の論理的整合性を根據とする批判はこれまでも数え切れないほど提示されており、それらのうちのどれが本質的に重要であるのかを見極め選別することは容易でない。そうした中でも、郭氏の指摘は重要と思われる。「恆」を恆常、恆久、普遍、終極などとする解釋と、一方で「恆」とは別の「先」や「後」を想定する解釋とは、果たして兩立可能か。「恆」の「先」とは、「恆」とは別の前段階を指す

のではなく、「恆」の中での比較的「前」を指すと言ったところで、先後のある恆常や恆久とはどのような意味か。従って、「恆」を生成の一段階を表現する實體的な固有名詞と見なす解釋（「恆なるもの」「恆なる世界」など）も、その精度に問題があると思われる。

なお、「恆先」あるいは「恆」については、これを『老子』の「道」と同一視する見解も多く提示されている。⁽¹⁴⁾ また逆に、『老子』の「道」との違いを重視し、そこに『恆先』の思想的特徴を見込む見解もある。王中江「新視野」（前掲）⁽¹⁵⁾ は、『恆先』はおそらく意圖的に「道」を用いずに別に新たな名前宇宙の根源を表現した。もし「恆先」を「道」と見なしたら、却って『恆先』の獨自性を蔽うことになる」（四二頁）と指摘する。⁽¹⁶⁾

二、「或」の語義

（一）「域」

次に、「或」の語義に関する研究状況を概観する。『恆先』の公開當初から、この「或」を「域」と見なす解釋

が提示され、今日まで多くの賛同者を得ている。早期に李學勤「楚簡《恆先》首章釋義」〔《中國哲學史》二〇〇四年、第三期、二〇〇四年〕は、『老子』第二十五章の「域中有四大」や、『淮南子』天文篇の「虛霏」等を根據に、「或は域、宇宙に相當」（八一頁）とする解釋を提示した。廖名春「上海楚竹書《恆先》新釋」〔《中國哲學史》二〇〇四年第三期、二〇〇四年〕もまた、「或は域の本字、字と同じ」（八四頁）とする。以後、「域」と解釋する見解は多い。任蜜林「緯書的宇宙圖式與古代的宇宙論傳統」（本稿注（7））は、「或」は即ち「域」、『淮南子』の「宇宙」（二〇五頁）とし、同「恆」…『恆先』哲學體系的核心」（本稿注（7））は「或」は、「恆」から「氣」に至る中間段階」（三〇頁）とする⁽¹⁷⁾。

一方で、より多義的な解釋を提示する研究もある。例えば、早期に龐樸前掲は、「或作」を「突然にながし」かの區域が動き出している」と譯し、「有或焉有氣」を「動く區域〔動區〕」が有り、ここに氣が有る」と譯す。これは、「或」を領域であり、かつ動態的な状態や機能

と解釋しているように見える。また、郭齊勇前掲（本稿注（7））は「域」としつつも「空間だけでなく時間を指す」（七頁）とし、王中江「新視野」（前掲）は、「或」は空間と無形の氣との兩者を兼ねた實在…『恆先』は「域」の創生を提示」（四二頁）とし、夏德安前掲は「或（intangibility）」の状態…「或」は「無」と「有」との間の過渡期の結節點」（一四四頁）とする。

（二）「域」とする解釋への批判

「或」を領域や空間とする解釋に反對する意見も少なくない。早期には、李旭昇前掲は、「或」は、ただ「恆先」の後、「氣」の前の一段階に過ぎず、「或」字の「不定代詞」としての慣用から解釋すれば、「或」が表現するのは、動くようでも動かず、發するようでもまだ發しない「蘊發狀態」であり、「質」「虚」の道體「不自忍」であり、まさに發出しようとする状態である」（二二〇頁）とする。領域の意味を排除するのは不明であるが、「或」を「あるもの」とそのまま解釋し、しかも「或」

に動態的な機能を認めるところに特徴がある。宇宙の生成過程で出現した一つの領域や、一つの段階として捉える階層的な理解から一步踏み出す契機が認められる。日本では早期に、中嶋隆藏『上海博物館藏戰國楚竹書(三)』所收「互先」小考(本稿注(8))は、「或」は「或する」というある種のはたらきを言うのであろうが、正確な意味は未詳：圍い込んで他から區別するという意味の「域」と通じると見、「分節すること」「限定すること」の意味で理解する：分節化が進行する次元(二三頁)との解釋を示した。⁽¹⁸⁾

一方で、領域や空間の意味とする解釋を明確に否定する研究もある。黄鴻春「上博簡《恆先》的「或」考論」(《北京師範大學學報(社會科學版)》第二期總第二一八期、二〇一〇年)は、「或」は域ではない。特に「域」を「字」に訓じる用例もない。宇宙空間とは解釋できない(一二八頁)とし、「或」は「無定代詞の有」であり、天地が落ちない原因、天地萬物自然がそのようにある運動作用(一二三〇頁)とする。注目すべきは、その論據

として、『管子』白心篇に「天或維」とある記載や、『莊子』則陽篇に見える「或使」「莫爲」といった用語およびその思想を傍證として示すことである。その『管子』白心篇の「或」は、萬物の生成や存在を決める作用およびその主體を指し、『恆先』の思想的問題意識を把握する上で無視できない用例と思われる。一方『莊子』則陽篇の記載は、そうした作用主體の有無が思想的問題意識となっていたことを示す證據と見なし得る。⁽¹⁹⁾ 黄鴻春氏の研究は早期の研究でありながらも、空間や領域の意味と、運動作用の意味とを峻別し、實證的に後者の解釋を提示した事例として、なお注目されてよいと思う。こうした「或」の用例を重視する近年の研究として、白奚「或」或使及其宇宙論模式——兼論《恆先》的成文年代」(《哲學研究》二〇一九年第八期、二〇一九年)は、「恆先」の「或」とは、「萬物を生み出す」ところの「もの」である。傳世文獻の「或」と新出土文獻の「或」は、大體において同一の概念と認めることができる」(五四頁)とする。⁽²⁰⁾

(三)「或」解釋の問題點

「或」については、『老子』第二十六章を根據に「域」と見なし、これを領域や空間とする解釋と、『管子』白心篇や『莊子』則陽篇の記載を根據に、これを運動や作用とする解釋とに大別できる。²²だが、先述の通り、運動や作用としての意味を重視する見解も、必ずしもその他の意味を排除するわけではない。例えば、曹峯『近年出土黃老思想文獻研究』（本稿注(一)）第四章『恆先』的氣論」は、「通俗的に言えば、「或」「氣」は「恆」の二人の子供である……彼らの身には「恆」の氣質を帯びており、それは萬物が生成する必然的條件、動力、あるいは具體的な執行者である」（一五五頁）とし、また白奚前掲に「本體論での最高概念について哲學的規定をするときに用いられるのは「恆」であり、宇宙生成の起點を描寫するときに用いられるのは「或」である」（五〇頁）とする。「條件」「動力」「執行者」「宇宙生成の起點」とあるように、その説明は多様である。²³

多くの研究には、『恆先』の生成論を階層構造として

捉える視點や、階層構造を提示することに『恆先』の思想的問意識を想定する視點が幅廣く共有されていると考えられる。例えば、王江中「終局根源概念及其譜系」（前掲）は、「域」は宇宙變化の第二階層にあり、それは第一階層或いは最高階層である「恆」から、自身の「自發性」の活動を通して延伸して生まれてきたもの」（三九頁）とする。概して用語の選擇が嚴密な研究であるだけに、「階層構造」に捉える自身の視點が明示されている。²⁴これら「概念」「者」「階層」「世界」「次元」等であることは、それぞれ「或」の一面を捉えたものである。だが、これらの用語は、それぞれの説明原理が異なり、それぞれが『恆先』に對して想定する思想的問題意識も異なるように見える。果たしていずれが「或」の本質と、『恆先』の思想的問題意識を捉える説明原理や視點として相應しいのか。一つの視點に限定しない立場をとるにしても、説明に際してどのような問題設定と説明原理とを採用しているのかを自覺し、それを明確に示す用語を嚴選することは、解釋の確定に必要であるに止

どまらず、議論の効率化のためにも有効と思われる。私見によれば、諸研究がなお領域としての意味を脱しきれない原因の一つは、階層構造として生成論を捉え、「或」を生成過程の一段階と捉える視點が疑問視されないことにあると考えられる。用語の用例調査を含め、何が思想的な問題意識となり得るのかについて、他文献の記載を對象に再検証する必要があると思われる。このことは、「或」のみならず、「恆先」についても同様であろう。

三、思想的問題意識

近年の動向で注目されるのは、『恆先』の思想的問題意識を宇宙生成論に限定する視點を反省し、『恆先』の後半部の記載を重視する研究が増加傾向にあることである。無論、研究の早期においても同様の指摘は皆無ではなく、とりわけ全文の釋文と通釋とを試みる研究であれば、必然的に後半部の記載にも解釋が提示されてはいた⁽²⁵⁾。だが、冒頭の宇宙生成論を對象とする研究が大半を占めた。

そうした研究史上の轉換點に當たる研究は、曹峯前掲書第四章「《恆先》的氣論」であると思われる。當研究は、生成論に關する戰國秦漢期の文獻を幅廣く對象とし、『恆先』の生成論を自生說に分類した。併せて、『恆先』の後半部の記載を重視し、『管子』『韓非子』『鶡冠子』『馬王堆漢墓帛書』『道原』等に見える形名思想の狀況を把握した上で、『恆先』後半部の「言」「名」「事」に關する記載について、解釋を提示した。そして、『恆先』が「氣是自生」「恆莫有氣」を論述する根本的な目的は、「無爲」「自爲」の人間哲學を導出することであり、この種の論述方式は、黃老道家の典型的な特徴を體現している」（一六二頁）とし、『恆先』をこれに分類した。『恆先』に政治思想を指摘すること自体は、早期の研究にも見られたが、『恆先』の思想的問題意識に對する從來の想定そのものを批判的に反省し、前半部の生成論が偏重される狀況から、後半部の政治論に注目することの必要性和有效性とを實證的に示したものとして、曹峯氏の諸研究は畫期的であり、これ以降の研究に對する影響力も

大きい。⁽²⁶⁾ 早期から継続的に多くの研究成果を發表してきた丁四新氏が、『楚竹書《恆先》』の三重宇宙生成論與氣論思想』（『哲學動態』二〇一七年第九期、二〇一七年）において、「名事」を通じて、『恆先』は政治主體の內在的構造およびその生成由來を不斷に追求している」（三六頁）とするのも、十年來の氏の研究に照らせば、視點の變化が認められると思う。この説明では、生成論の主題を「政治主體」の由來の追求に見出す見解が顯著と思われるからである。

こうした問題意識が共有され、『恆先』研究は新たな局面にあると思われる。任蜜林「『恆』…《恆先》哲學體系的核⼼」（本稿注（7））は、曹峯前掲および一連の研究に言及しながら、それらを批判的に繼承し、「『自爲』の基礎は『氣是自生』にあるのではなく、本體である『恆』の無爲にある」（三五頁）とし、「統治者がうまく國家を治めるには、本體である『恆』の無爲に倣う必要がある」（同上）とする。また「本體の『恆』の無爲思想の指導のもとでのみ、國家をよりよく統治できる。こ

れは『老子』を代表とする道家思想と密接な關係がある」（同上）とする。「統治者」に對しても「指導」の遵守を求めることに、『恆先』の思想的特徴を見出す見解に見える。また、葉樹勛「從『或作』氣作』到『自作爲事』」（『中山大學學報（社會科學版）』二〇一七年第二期第五十七卷、二〇一七年）は、「根本的には、『強者』〔第十號簡に見える語〕の行動も『作』の表現の一種……だが、これらの人の『作』の程度が強烈に過ぎ、他者の『作』を干渉して亂し、人々の『自作』の全體的要求に違反するに至ると、この局面において、『強者』の『作』は不當なものとなる。『自作』の全體的要求は、いかなる人の『自作』であつても、他者の『自作』を妨げることとはできず、さもなくば、一人一人の『自作』の全體秩序を破壊する」（一五八頁）とする。この「強者」の「作」と「全體的要求」とを對置する説明には、現代的な民意の尊重が想定されているように見える。⁽²⁷⁾ その一方で、周耿「論《恆先》的萬物生成論」（本稿注（14））は、「『恆』は、萬事萬物の總合的な規律およびそ

こから引伸された原則、方法であり、道家の道の内實と一致するもの。規律は無形でかつ永遠的存在であり、それは萬事萬物の成長や發展を支配するが、それ自身はいかなる主觀的意志や慾望をもたず、人々はその規律を認識し遵守することを通して、事業の成功を獲得することができる」(二頁)とする。ここに「人々」とは、民衆

を指すように見え、一方の「原則」「規律」とは、支配者に一元的に掌握され、その正しさの絶對性や存在の普遍性は「道」と同一視されたものとして解釋しているように見える。そして、一方の「人々」の「事業」については、あくまでその「原則」「規範」の遵守を通してのみ成功を保證する思想として、『恆先』を捉えているように見える。事は政治體制や社會制度に及ぶだけに、今後はこれまでの生成論に特化した研究以上に、より多くの研究者の關心を集め、更に様々な問題意識から様々な現象の捉え直しが進み、様々な見解が提示されるものと豫想される。⁽²⁸⁾

目下、文獻の記載に即した實證的な問題提起として注目されるのは、葉樹勛前掲に「既知の先秦文

獻で、『恆先』ほど「作」を重視する文獻はなく、またこれほどまでに「作」の主題を通して宇宙と人類との活動方式を集中的に議論するものはない」(二五〇頁)とある指摘である。⁽²⁹⁾

現在から顧みれば、政治論に注意を促す指摘は、研究の早期にもあった。その中でも注目したいのは、王保琰「竹書《恆先》新解」(本稿注(17))で、『恆先』の思想を次のように要約している。

原初あるいは創造の部分は自然に基づき完全である。∴政治制度の中で、後に改變された部分は人爲に由來する、即ち「有人焉」である。人爲の造作には必ず不善があり、亂の端緒であるという。《恆先》のこの種の政治思想はとても保守的で、その保守の原因は「恆」にある。∴その政治思想は「恆」を第一原則とせざるを得ない。したがって、「恆」と變革とは正反對であり、故に《恆先》は政治制度の變更については特に敵對的な態度を持している(三一頁)。注目されるのは、恆常普遍や原初に對する探求と、政

治思想とが組み合わさることの歸結として、「政治制度の變更」に對する「保守性」と「敵對的態度」とが指摘されることである。無論こうした要點の捉え方にも賛否はあるが、『恆先』のみならず、「無爲の統治」の内實をより具體的に明らかにするためには、考慮すべき見解と思われる。

また、數件に過ぎない日本の研究でも、早期に注目すべき見解が示されている。中嶋前掲は、「一見するところ、「無有」なる状態から萬物が出現するまでの過程を順次説き明かすという宇宙生成論を展開しているかに認められるところがある。だが、論理展開が筋道立っていないために、この文獻の敘述には、すっきりとは理解したいところが多い」（二二頁）と指摘し、「本文獻を、かりに、古代における宇宙生成論の多様性を考えるほんの一助として參考にすることにはさほど問題がないにしても、しかし、もとより、本文獻の主眼が宇宙がいかにして生成され萬物がいかにして生成されたのかを説き明かそうとする所に在ると見るわけにはいかないであら

う」（二三頁）との見解を示している。今日でも検討に値する見解と思われる⁽³⁰⁾。

おわりに

『恆先』の思想内容については、まさに議論百出の状態⁽³¹⁾と言え、論點を整理し問題點を見極め、それについて幅廣い賛同を得る解釋を提示することは容易でないと思われる。本稿はその経過報告とし、『恆先』の思想内容については、稿を改めて報告したい。

註

- (1) 范毓周「上博楚簡《恆先》新釋及其簡序與篇章結構新探」（《中原文化研究》二〇一五年第一期、二〇一五年）は、「二〇〇三年末の公開以來、わずか數年のあいだに數十種の論考が發表されたが……高潮期が過ぎた後、最近の論著は非常に少ない」（一一三頁）とする。

- (2) 曹峯「近年出土黃老思想文獻研究」（二〇一五年、中國社會科學出版社）第二編第一部分第六章「《恆先》研究綜述——兼論《恆先》今後的研究方法」、黃敦兵「近四十年出土的道家簡帛文獻研究回顧及前瞻」（《夏華學術》

第六輯、二〇一二年、<http://58.49.125.196:8080/cwh/6405/view>、俞紹宏・張青松編著『上海博物館藏戰國楚簡集釋』（第三冊、社會科學文獻出版社、二〇一九年）「三、恆先」「説明」。また、王連成「從《互先》談理解與編聯的關係」（簡帛研究 https://www.bamboosilk.org/showarticle_articleid_1823.html 二〇一〇年）は、竹簡の配列に關する早期の諸見解をまとめている。

(3) 釋文は、俞紹宏・張青松編著『上海博物館藏戰國楚簡集釋』（本稿注(2)）による。

(4) 例えは、邢文「楚簡《恆先》釋文分章」（『中國哲學史』二〇一〇年第二期、二〇一〇年）は、「生」「複」の論が主題となっていることは明白（五三頁）とする。

(5) なお、冒頭の「恆先無有」の一句についても、既に句讀が様々に議論されている。曹峯前掲（本稿注(2)）第二編第一部分第二章『恆先』注釋」は、先行研究の句讀を「恆先、無有」「恆、先無有」「恆先無、有僕」「恆、先、無有」の五種類にまとめ檢證している（八四頁）。

(6) また、李零「上海楚簡《恆先》語譯」（『中華文史論叢』總第八十一輯、二〇〇六年）は「恆」は、原始のもの、終局のもの」（二八四頁）とする。

(7) 例えは、郭齊勇『《恆先》——道家形名思想的佚篇』（『江漢論壇』第三〇〇號、二〇〇四年。後、丁四新主編『楚地簡帛思想研究（二）』湖北教育出版社、二〇〇五年

所收）は、「終極の「道」體が作用・動作する以前の狀態を指し：現象世界の形而上學の根據と（本體）、根源、動力（宇宙の生生について言う）が恆先、即ち道である。道は恆常、恆在、恆久普遍的、永遠に偏在する。：論理の上でも時間の上でもいづれも先にあるので恆先という」（六頁）とし、任蜜林「緯書の宇宙圖式與古代的宇宙論傳統」（『中國哲學史』二〇〇八年第二期、二〇〇八年）は、緯書の生成論に關する記載を踏まえ、「恆先」は「宇宙萬物の先にあり：「或」を產出する」（一〇五頁）とし、谷中信一「『恆先』宇宙論析義」（『中國出土資料研究』第十一號、二〇〇七年）は、「恆は天地宇宙生成の始原的實在と解されている」（五四頁）とし、「恆先」では、「恆」を萬物の始元的存在と規定」（五五頁）とし、「恆先」（時間も空間も物質も何もかも一切が存在しない始原的狀態）（同上）とし、同注15に「究極の實在である「恆」（六二頁）とし、竹田健二「上博楚簡《恆先》における氣の思想」（『中國研究集刊』第三十六號、二〇〇四年）は、「冒頭部分で：「恆」と「或」という二つの世界が設定されており、「恆」なる世界から「或」なる世界が生じて世界が轉換し、宇宙が生成されていったとする：この宇宙生成論によれば、宇宙の始原は、「無」であるところの「恆」であり、「恆先」とは、「恆」という始原の段階の時期」を指すと考えられる」（一

六九頁）とし、曹峯「『自生』觀念的派生與演變——以《恆先》爲契機」（『中國哲學史』二〇一六年第二期、二〇一六年）は、「萬物の發生、運動、存在の總根源であり、總依據、總前提」（二二頁）とし、張景・張松輝「論出土道家文獻與老莊道、氣和合生物思想的一致性」（『中國四庫學』第一輯、二〇一八年）は、「道（恆）は空間（無）と事物（有）とに先んじた存在」（二七七頁）とし、孫功進「論《老子》之『道』的『常』與『真』」（『聊城大學學報（社會科學版）』二〇一八年第二期、二〇一八年）は、「恆」は萬有の本源本體であるばかりでなく：極度の「質朴」、極度の「靜」、極度の「虛」であることを特徴とする」（八二頁）とし、任蜜林「『恆』……《恆先》哲學體系的核心」（『齊魯學刊』總第二六九期、二〇一九年第二期）は、「宇宙萬物の本體」とする。

（8）任蜜林「《恆先》章句疏證」（『中國哲學史』二〇一六年第一期、二〇一六年）、中嶋隆藏「『上海博物館藏戰國楚竹書（三）』所收『互先』小考」（『集刊東洋學』九十四號、二〇〇五年）、順眞「上海楚簡道家文獻《恆先》篇通解及章節擬構」（『中州學刊』二〇〇九年第二期、二〇〇九年）など。

（9）また、連劭名「楚竹書《恆先》新證」（『中原文物』二〇〇九年第二期、二〇〇九年）は、「恆」は馬王堆漢墓帛書《易傳》の「大恆」に当たり、「恆先」は「老子」

第四章の「帝之先」に當たるとし（七五頁）、郭靜雲「先秦自然哲學中的『天恆』觀念——由竹簡《太一》與《恆先》論及宇宙源頭」（郭齊勇主編『儒家文化研究』第一輯、三聯書店、二〇〇七年）は、「恆先」は「大恆」：「大恆」は即ち「太一」「大極」と同一の現象と概念」（三六四頁）とする。

（10）孫功進「上博楚簡《恆先》的『復』觀念探析」（『中原文化研究』二〇一六年第二期、二〇一六年）は、「恆先」は、「恆」の先で、「恆」が未だ展開していない狀態あるいは段階を指す」（一八頁）とし、同「論《老子》之『道』的『常』與『真』」（本稿注〔7〕）は、「恆は萬有の本源、本體」（八二頁）とし、白奚「萬物宇宙的始基『恆』還是『恆先』？——『恆先无有』釋讀之我見」（『中國哲學史』二〇一六年第二期、二〇一六年）は、「『恆先』は獨立の概念ではなく、『恆』自身が永遠、恆常、唯一絶對など終極の意味を表示する最高の哲學概念」（二四頁）とし、「恆」は最高の、最初が存在で、恆の先には何もない、「无有」は「恆」の本質特性、本質基底」（二五頁）とし、陳麗桂「『道』的異稱及其義涵衍化——『一』與『互』」（北京大學出土文獻研究所編『古簡新知——西漢竹書《老子》與道家思想研究』上海古籍出版社、二〇一七年所收）は、「互」字は品詞も語義も明確で（『互先』は「互」と「先」とが結合した特殊名詞）、

絶對的な哲學的用語でありかつ生成根源あるいは始原としての意味を相當程度に含む」(三三九頁)とし、王中江『根源、制度和秩序——從老子到黃老』(中國人民大學出版社、二〇一八年)は、「恆之先」の語の構造は、「恆」という「先」の意味……いかなる具體的な事物もない「先」は、「恆」に屬するものであり、従つて明らかに「恆先」の「恆」は宇宙と萬物の終極的根源を指す」(五一頁)とする。「恆」を實體的な概念と明示する典型例と言えよう。

- (11) 「恆先」を「極先」と讀むものに、鄒可晶「馬王堆漢墓帛書《十大經》補釋二則」(簡帛網 www.bsm.org.cn 二〇〇九年)、范麗梅「或極焉生——上博《互先》宇宙化生作用的三個面向」(《饒宗頤國際學院院刊》第五期、二〇一八年)、陳民鎮「上博簡《恆先》所見宇宙生成論重探」(《孔學堂》二〇二二年第一期、二〇二二年)等がある。

- (12) 蕭毅『楚簡文字研究』(武漢大學出版、二〇一〇年)第二章第二節(一)「無義繁化」。

- (13) 研究の總数が数件に止まる日本においても、早期から既に顧川智「上博楚簡《互先》の宇宙生成論——馬王堆漢墓帛書《道原》との關連を通して」(《日本中國學會報》第五十九集、二〇〇七年)は、「恆先」の「恆」を「根源のものと捉えてそれを萬物生成の本體とする」(二

二頁)ことに反對し、「生成論の始め」(同上)ではないとの結論を示している。近年であれば、葉樹勛「楚簡《恆先》的編聯再驗與思想新解」(《管子學刊》二〇一七年第一期、二〇一七年)は「恆」と「或」の作用はずつとある。この二者は單に最初の起點としてのみで、それ以降の宇宙生成の大業に參與しないのではなく、……世界の内在原理およびその動勢として、ずつと生成事業の展開を規定し、推進している」(一〇八頁)とする。ただ、残念ながら、後者のこの魅力的な解釋には、その妥當性を示す實證的な證據が十分に示されていない。

- (14) 周耿「論《恆先》的萬物生成論」(《光明日報》二〇一三年四月一日十五版)は、「老子の後學として、《恆先》はその道論の刷新性を突出させ、「恆」を「道」の代名詞とした。この代名詞を採用することの哲學的意義は、一方では「道」の永遠的存在性を突出させ、「道」の萬事萬物の根據および價值根源としての權威性を確立すること」(一頁)とし、「恆」は、萬事萬物の總合的な規律およびそこから引伸された原則、方法……「恆」が抽象的な規律であれば、それはいかにして萬物を生成できるのか」(二頁)と問いを立て自説を展開する。また、徐文武「論楚簡道家四篇的宇宙論」(《河南師範大學學報(社會科學版)》第四十一卷第一期、二〇一四年)は、「恆」は楚方言で廣大無邊の意味がある。揚雄『方言』

- 卷二に「恆、言既廣又大也。荊揚之間、凡言廣大者謂之恆」とある。ここから、楚方言における「恆」と「道」とはその表現する内容が同じ（二三頁）とした上で、「恆は、時間と空間との二重の意味を表す。時間の意味を表せば、時間が無始無終であること、即ち絶対的「永遠」を表す。空間の意味を表せば、空間の無邊無際、即ち『恆先』にいう「太虚」である」（二四頁）とし、鄭萬耕「楚竹書《恆先》簡說」（『齊魯學刊』總第二八四期、二〇〇五年）は、「『恆先』の一語は『恆先』の作者が『老子』の「道」に關する學說を概括して一つの別の範疇として確立したもの」（一八四頁）とする。その他、『老子』の「道」と同義とするものに、趙建功『恆先』意解」（『華中科技大學學報・社會科學版』二〇〇六年第二期、二〇〇六年）、同「以《易》解《恆先》六則」（『中國哲學史』二〇〇六年第一期、二〇〇六年）、崔濤「試論先秦時期宇宙生成論模式的演進」（『人文論叢』二〇〇一年）、葉樹勛前掲（本稿注13）、郭齊勇前掲（本稿注7）、歐陽禎人『從簡帛中挖掘出來的政治哲學』（武漢大學出版社、二〇一〇年）第五章第五節『恆先』之氣與《孟子》之氣比較研究」などがある。
- (15) 後、同『簡帛文明與古代思想世界』（北京大學出版社、二〇一一年）第二章一「恆先……宇宙的原初及其狀態」（五八頁）。

- (16) 劉全志「論先秦時期最高範疇的多樣性與統一過程——以道的登場爲中心」（『哲學研究』二〇二一年第三期、二〇二一年）もまた、「見すこせないのは、『恆先』は「道」に等しいが、『恆先』の作者は「道」を用いずに恆先を選んだことである」（七二頁）と指摘する。その他、早期の研究にも、例えば、劉貽群『恆先』三題」（『文史哲』總第二八六期、二〇〇五年、後、丁四新主編前掲書所收）は、「恆先」を「時間を表す語。終極、絶対的な「先」（三四頁）としながら、「道」が有する時間屬性が「恆先」であるとは言えても、『恆先』自體が直ちに「道」なのではない。「恆先」は「道」に同じではなく……「道」の屬性に對する一種の描寫」（三五頁）とする。また、郭靜雲前掲（本稿注9）は「太一」と「恆先」は同一の「天恆」概念であるが、決して「道」の別名ではなく、それは北辰を天地萬事の源とする觀念」（三七三頁）とし、『恆先』の「恆先」は、「太一」の別名であるが「道」思想範疇の別名ではない」（三七五頁）とする。郭梨華『《互先》及戰國道家哲學論題研究』（『中國哲學史』二〇〇八年第二期、二〇〇八年）は「恆先」は決して「道」の單なる代名詞ではない」（三九頁）とし、夏德安「早期中國的宇宙生成論與文字學——談上海博物館藏楚簡《恆先》」（『人文論叢』二〇〇九年卷、二〇〇九年）は「恆先」を「everness preceding. 永恒」

「恆先」と、絶對的宇宙の實體である「道」との混同は避けるべき」（一四三頁）と指摘する。

(17) また、同本稿注(8)前掲は「或」は「恆」「氣」の中間にある状態（九八頁）とする。その他、「域」と解釋するものに、鄭萬耕前掲（本稿注(14)）、王保玟「竹書《恆先》新解」（『中國史學』第十六卷、二〇〇六年）、彭樹欣「上海簡《恆先》在文學發生論上的價值」（『山東師範大學學報（人文社會科學版）』第五十一卷、總第二〇八期、二〇〇六年）、趙建功「《恆先》意解」（本稿注(14)）、朱淵清「域」の形上學意義」（劉大鈞主編『簡帛考論』上海古籍出版社、二〇〇七年）、陳靜「《恆先》義釋——思想史視野下的一種解讀」（『西安建築科技大學學報（社會科學版）』第二十六卷第一期、二〇〇七年）、連劭名前掲（本稿注(7)）、歐陽禎人前掲（本稿注(14)）、曾振宇「竹書《恆先》的思想史意義」（『史學月刊』二〇一〇年第七期、二〇一〇年）、同「楚簡《恆先》三題——兼論《恆先》的學派屬性」（賈磊磊、孔祥林主編『第二屆世界儒學大會學術論文集』二〇一〇年）、譚寶剛「上博戰國楚竹書《恆先》研究評述」（『長江大學學報（社會科學版）』第三十三卷第三期、二〇一〇年）、王強・王小娟「『自生』……上海簡《恆先》對老子『自然』觀念的演繹」（『蘭臺世界』二〇一一年六月下旬、二〇一一年）、周耿「釋『恆先無有』」（『玉林師範學院學報（哲學社會科學）』

第三十三卷第一期、二〇一二年）、同前掲（本稿注(14)）、孟慶楠「自然與治道——先秦諸子自然狀態學說的比較研究」（『雲南大學學報（社會科學版）』第十五卷第一期、二〇一六年）、張景・張松輝（前掲本稿注(7)）等がある。ただし、上記のうち陳靜氏は後に「《恆先》の本文研究與思想解釋」（前掲）において、「恆先」に「或、恆焉」とある記載を根據に、「或は恆の別名」（九頁）とする。

(18) この他、獨特な見解としては、順真前掲（本稿注(8)）は「或」を「疑」の意味とし、「周易」乾卦九四に「或躍在淵」とある：「恆先」の作者は、擬人的な修辭法で、宇宙本體が刹那に生起するときの宇宙精神の状態を描寫：自己懷疑：疑念が動くことが「或作」（一五二頁）とし、淺野裕一「古代中國の宇宙論」（岩波書店、二〇〇六年）第三章第三節「恆先」の宇宙生成論は、「惑」という「惑亂」、負の感情」（一〇八頁）とする。

(19) 「或」の本質を作用や運動に認める見解も散見し、早くは李零「上博（三）」「釋文」が「或然」の意味として以來、荊雨「帛書《黃帝四經》道原」思想闡釋」（丁四新主編『楚地簡帛思想研究（二）』本稿注(7)）がこれに賛同し、崔濤前掲（本稿注(14)）は、「偶然的、自發的な造作を指す」（一四頁）とし、蔡林波「先秦『或使說』辨義」（『學術研究』二〇一三年第五期、二〇一三年）は、「宇宙の本源存在と運行機序。『或』は決して他

者、外部の實體的存在ではなく、動態性、過程性の宇宙存在自身。それは既に宇宙自身をその内に含み（この意味では「或」は「恆先」、顯現して宇宙となる（この意味では「或」は、「或作」）（三一頁）とし、葉樹勛前掲（本稿注（14））は、「不定代詞であり「作」の主體、なにがしかの不確定の態勢を指す」（一〇六頁）とし、孫功進「上博楚簡《恆先》的復觀念探析」（前掲）「論理的には、「或」は「恆」の後の一段階：「或」は「恆」に内在する一種の萬物を化生する潜在的な動力に過ぎない」（八一頁）とする。

(20) 郭靜雲『《恆先》補考二則』（簡帛網 www.bsm.org.cn 二〇一一年）もまた、「域」とする解釋に反對する。

(21) これに先立ち、白奚・嶽賢雷「惑、還是、域」（『哲學動態』二〇一六年第十二期、二〇一六年）では、「混沌、恍惚、窈冥：狀態の原始の宇宙であり：混沌狀態の原始宇宙に内在し躍動する一種の潜在的で止むべからず分化の趨勢」（三五頁）としており、後に見解が變化したように見える。また、年代としては、郭梨華前掲（本稿注（16））が既に『管子』白心篇や『莊子』則陽篇および『莊子』齊物論篇の「眞宰」などに注目し、「或」は自然的に發生した狀態、限定できない狀態を指す」（四四頁、後に同『出土文獻與先秦儒道哲學』（萬卷樓、二〇〇八年）第六章「《互先》及戰國道家哲學論題研究」

（二〇七頁）としているが、一方では「或作」は始原からその作用を説き、「或使」は萬物から始原の存在を論じる。「或」について言えば、どちらも一つの不限定の哲學作用を發揮。領域の意味であれば『老子』の「域中」（四五頁、前掲二〇七頁）とも説明しており、領域の意味を認めているようである。なお、出土資料とは別に、『莊子』『管子』『呂氏春秋』等における「或」について分析したものに、楊柳橋「先秦哲學「莫爲」「或使」（『天津師大學報』一九八四年第四期、一九八四年）、王曉昕「先秦哲學中「或使」與「莫爲」之爭發展的三個段階」（『貴陽師專學報（社會科學版）』總第十六期、一九八九年）、郭齊勇主編『中國哲學通史』（吾淳著「古代科學哲學卷」、江蘇人民出版社、二〇二一年）第三章第三節二「《淮南子》中的「或使」說「莫爲」說及知識論證」等がある（白奚前掲）。

(22) この他、李旭昇前掲は、「或」字の「不定代詞」としての常用義から解すれば、「或」が表現しているのは、まさにある種の動いているようで動かず、發するようでもまだ發しない「蘊發狀態」であり、質、虚の道體「不自忍」であり、發出しようとする狀態」（二一〇頁）とする。この「不定代詞」とする指摘は、後の研究にも一定の影響を與え、様々な解釋に應用され發展する。

(23) 熊奕泓「《恆先》再考——「自生」の宇宙生成論を中心

に―」（『東洋古典研究』二〇一九年）は「或」と「恆」とは等値される特殊概念」（二二頁）とし、また「生成の模範」である「恆」と「或」（二二頁）、「或の段階」（二二頁）とも説明する。

(24) 丁四新「或」…上博楚竹書《恆先》の一個疑難概念研究」（前掲）は、「或」に關する諸見解を四つに分類した上で、『恆先』は不定代詞「或」によって宇宙化成の一段階を表示」（二三頁）とする。

(25) 後半部に對する解釋を專論したものに、李旭昇「從『求而不思』談《上博三・恆先》後半部的釋讀」（李學勤・林慶彰等著『新出土文獻與先秦思想重構』臺灣書房出版有限公司、二〇〇七年所收）がある。

(26) また、曹峯「關於黃老道的一些親認識」（『諸子學刊』編委編『諸子學刊』第十二輯、上海古籍出版社、二〇一五年）は、「郭店楚簡《太一生水》の上半部分にせよ、上海楚簡《恆先》の上半部分にせよ、いずれも我々に傳世文獻には見られなかつた獨特の宇宙生成論を提供し、國內外の學者はみなそれらの宇宙生成論に引きつけられ物理的意味での宇宙生成論の具體的な構造について熱心に討論した。…本質的な問題は、黃老道家が使用する宇宙生成論は過剰に重視するには値せず、早期黃老道家が多種多様な宇宙生成論と天道原理とを引用するのは、一つの過程、一つの手段に過ぎず、最終的にはどれも人間

政治の合理性を導出するために他ならない」（二二頁）とする。

(27) 熊奕淞前掲（本稿注(23)）も、『恆先』の作者が主張する政治の形は百姓の「自作」、「自爲」に委ねるもの、すなわち統治者の「無爲」であることに間違いはないであろう。…百姓に干渉しない「無爲」の政治を導いていく」（二〇頁）とし、『復』のはたらしによる生成は自發的なものであり…百姓による自發的で持續可能な「自生」、「自作」もまた「復」のはたらしのもとにあるとされ、この自發性、持續可能性をさまたげないものとして統治者の「無爲」があるべき統治方法として語られる。これが『恆先』の思想構造の大枠である」（二二頁）とする。

(28) また、李銳「中國古代宇宙生成論的類型」（『江淮論壇』二〇二〇・一、二〇二〇年）は、「自生説は、物に自由自主を與えるが、意に任せた妄動には反對し、自然に従い、規律に服従して事を進めることを強要する…『恆先』は後文で、「恆」と「氣」との相互作用を強調し、「復」の規律に言及する」（五八頁）とする。その他、『恆先』の政治思想や黃老思想との關連を重視するものに、陶磊『《恆先》思想探微』（劉大鈞主編『簡帛考論』本稿注(17)）、陳慧・廖名春・李銳『天、人、性・讀郭店楚簡與上博竹簡』（上海古籍出版社、二〇一四年）第

四章「上博竹簡中の天人關係」、李笑岩『先秦黃老之學淵源與發展研究』（上海古籍出版社、二〇一八年）第二編第五章第二節「上海博物館戰國楚竹書三篇及其黃老傾向」等がある。

- (29) 早期にも、黃人二『上海博物館藏戰國楚竹書（三）研究』（高文出版社、二〇〇五年）第三章第二節「讀上博藏簡恆先書後」は、『恆先』の最も重要な觀點は、宇宙天地の描寫にあるのではなく、「先」字のみにある（二五一頁）とする。

- (30) 吳根勇「上博楚簡《恆先》篇思想探析」（丁四新主編『楚地簡帛思想研究（二）』本稿注（7））は、『恆先』の「先」に注目し、それが『老子』第六十七章の「不敢爲天下先」といった思想と相當に異なるとしながらも、一方で、『老子』第六十四章の「其未兆易謀」や、第六十六章の「爲之於未有、治之於未亂」については、その類似を指摘する（六六頁）。

- (31) その一端については、本論および本稿注（7）（10）（14）（19）（21）等参照。

〔附記〕本研究はJSPS科研費22K00098の助成を受けた。

寄稿規程

編集委員会

一、寄稿者は本學會員に限りです。枚数制限は以下のとおりです。必ず完全原稿でお願いいたします。

論考 四百字詰四十枚程度

研究ノート 四百字詰二十枚程度

書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度

國際學界動向 四百字詰十枚程度

なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添附してください。

○外國語による論文要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員会が校訂する場合があります。外國語は原則として英語とし、語数は三百語程度とします。中國語表記はウェード方式、あるいは拼音（ピンイン）方式でお願いいたします。

○外國語による論文要旨の日本語原文

投稿に際してはホームページ上の寄稿要項、原稿整理票を参照してください。

○本誌に掲載された原稿は、發行より三年経過した後にウェブ上に公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。（詳しくはホームページをご覧ください）

三、原稿締切は、一月二十日、六月二十日いたします。

四、内容は未發表のものに限りです。採否は、當學會に御一任ください。

五、抜刷はPDFファイルおよび印刷冊子三十部まで無償。それを超える部数は御希望の場合は、實費をいただきます。

六、特殊製版（圖版・寫真版など）、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先

日本道教學會事務局
E-mail: info@taoistic-research.jp
* 郵送の場合は當學會ホームページ上の連絡先に
送り下さい。 URL: https://www.taoistic-research.jp

A Summary of Research on Shanghai Museum Bamboo slips *Hengxian* (恆先)

NISHI Nobuyasu

This paper reports on the progress and status of the research on the Shanghai Museum Bamboo slips *Hengxian* (恆先), especially the interpretation of the words “恆先” and “或”, and the subject of this document. In the first section, “hengxian” is classified into two categories: “恆先” as a singular concept, and its division into two different concepts as “恆” and “先.” Then, it introduces the view that “恆” is a substantive concept (Chapter 1, Section 1) and outlines the arguments surrounding the character’s identification (1Section 2). It then presents the analysis results of the issues in the interpretation of “恆先” (1Section 3). In Chapter 2, various views on the meaning of “或” are examined in terms of those who read it as “域” against those who read it as “或,” and a summary of the state of the research is provided (Chapter 2, Section 1 and 2). An analysis of the issues involved in the interpretation of “或” is also presented (Section 3). In the final section, this paper highlights the recent trend of scholars who have begun to focus on the latter half of *Hengsheng* (Chapter 3). According to this survey, the shift among scholars from the traditional perspective, which emphasizes the generation theory, to one that views the relationship with political thought shows that the study of *Hengxian* (恆先) has entered a new phase.